

チェーホフとサハリンの美しいニヴフ人

村上春樹、大江健三郎からサンギまで

沼野 充義

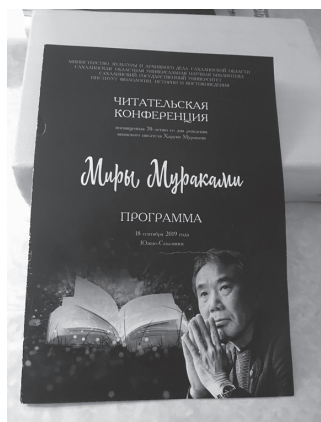
これは2020年3月28日、東京大学文学部1番大教室で行われなかった（新型コロナウイルス感染症流行のために中止された）退職記念＜最新＞講義の草稿である。

ユジノ・サハリンスク村上春樹70歳記念会議への招待状

本日は新型コロナウイルス感染症流行の最中にお集まりいただき、ありがとうございます。ロシアのプーシキンには「ペスト流行時の酒盛り」という劇詩がありまして、もともとはジョン・ウィルソンというイギリスの詩人の作品の翻案ですが、プーシキンの筆はペストが猖獗を極め、町全体が壊滅しつつある最中、狂乱の酒宴に打ち興ずる若者たちを見事に描いています。私もこんなときに呑気に文学の話でもないだろうとも思うのですが、じゃあそれ以外に何ができるかと言えば、何もできない。どんなに大変な時でも、自分が一番うまくできることをやり続けることが、結局は戦うことじゃないか、などとも思います。などというと、ちょっとエラそうになるので、まあそれはともかく、大学教師が定年退職を記念して行う講義を「最終」と呼ぶのが世の習わしですが、文学研究にはここまでやったらもういい、という意味での終わりなどあり得ません。今日のお話では、いま新たにやっていること、考えていることを取り上げたいと思いますので、これは「最終」ではなく、「最新」講義なのです。それで今日はサハリンを軸にして、何人かの作家たちが「つながっていく」というお話をしたいと思います。

昨年の初夏だったでしょうか、ドミトリー・コヴァレーニン君からフェイスブックのメッセージが来ていました。彼はロシアにおける村上春樹人気に火をつけた日本文学翻訳家で、自身カリスマ的な魅力を持った人物です。なんでも9月にサハリンで村上春樹の70歳を記念して国際会議が行われるので、出席して講演をしてくれないかと言うのです。そうすると皆さん、「どうしてまたサハリンのような辺境の地で？」と疑問に思われるかもしれません。『1Q84』の読者にはお分かりでしょうが、村上春樹はこの小説でチェーホフの『サハリン島』のことを大きく取り上げているので、サハリン島の現在の住人たちが村上春樹のことを少々「自分たちの作家」と思うようなところもあるのでしょう。しかし、もともと村上春樹はロシアで大変な人気があり、その人気は『1Q84』の前から、ロシアの東の果てサハリンまで伝わってきていたのです。数年前、初めてサハリンに行っ

たとき、私はユジノ・サハリンスクの小さな書店の——というか日本でいうような「大書店」はこの町にはないのですが——外国文学書の棚に、三島由紀夫と村上春樹とカズオ・イシグロの本が並んでいるのを見て（これらの本はすべてはるか彼方、モスクワで出たものです）、モレッティのいうような世界文学の波はこんな辺境まで確かに来ているのだ、と感心したのでした。なお、いまイシグロの名前を出したのは、間違いではありません。ロシア人はイシグロを日本作家と見なして、書棚で三島や村上と並べたのですが、これは「無知」ゆえではないのです。ロシアの文学好きの読書人はイシグロがイギリスに住み、英語で書く作家だということをよく知っています。それでもイシグロは、彼らにとってやっぱり広い意味の「日本の作家」なのです。



村上春樹 70 歳記念会議（ユジノ・サハリンスク）のプログラム

いきなり話が少々脱線しました。サハリンと村上のつながりに話を戻すと、そもそもサハリンの村上会議のことを私に知らせてくれたコヴァレーニン君はサハリン出身なのです。そして村上さんは 2003 年にサハリンを一度訪れているのですが、そのとき、村上さんをサハリンに言わばつないだのが、コヴァレーニン君だったのです。村上春樹はいま言ったようにロシアで人気が高く、熱心な読者も沢山いますから、ロシアから招待したいという話は一度ならず来ていたと思うのですが、一度も招待を受けたことがありません。しかしモスクワやペテルブルクには特に行きたいとも思わないらしい村上春樹も、サハリン行きには自ら興味を持ち、「東京するめクラブ」の三人（村上春樹の他、吉本由美と都築響一）による旅行が 2003 年の 6 月末から 7 月初旬にかけて実現したのです。そのとき案内役を務めたのが、サハリンに土地勘のあるコヴァレーニンでした。彼らのサハリン旅行の様子は東京するめクラブ『地球のはぐれ方』（文藝春秋、2004 年）に詳しく書かれていますが、それに加えて、ロシア語で書かれて、日本語には翻訳されていないので、日本では全然知られていませんが、じつはコヴァレーニンには『スシ・ノワール——面白い村上食いの学』（モスクワ、2004 年）というロシア語の著書があって、そこに 70 頁以上にわたる詳細な日録の形で村上春樹一行のサハリン旅行が写真とともに記録されているのです。ちょうど 2003 年から 2004 年にかけて、コヴァレーニン君は東京大学の私のもとに国際交流基金日本研究フェローとして長期滞在してしまっていて、その最中、村上事務所から電話を受け、サハリン旅行について助言を求められて、事務所まで出向いて、東京するめクラブの面々と話をしたのだそうです。そのときの様子について、ちょっと『スシ・ノワール——面白い村上食いの学』から引用してみましょう。

具体的には（サハリンで一沼野注）何を見たいんですか、と私が聞くと、ムラカミはふむ、と考え込んだ様子で、ユミさんのほうを見る。と、ユミさんはツヅキのほうに目をや

る。するといつも陽気なこの太っちょは呑気に肩をすくめる。

「何があるのかも分かんないんだから、ともかく行って、見てみよう！」

三人の日本人は僕を見つめる。挑発だな、と僕は悟った。これはもう引くに引けない、乗りかかった船だ……。

村上とアメリカ文学／ロシア文学

ここで村上春樹とサハリンという話題に入る前に、彼にとってロシア文学が何を意味したのか、少し考えてみたいと思います。言うまでもなく、村上春樹は一般的には日本作家の中でも特に「アメリカ的な作家」と見なされています。アメリカ文学者の平石貴樹が単独で執筆した堂々たる『アメリカ文学史』には、日本でアメリカ文学が受容された結果の、いわばアメリカ文学の一部として村上春樹が登場するほどです。平石さんといえば、じつは私の高校の大先輩で、それから素晴らしい推理小説作家でもあることは、皆さんご存知ですか。いや、その話をするとまた話がそれていくので、平石さんの推理小説の魅力については措くとして、この文学史の末尾に彼はこう書いています——「本書の掉尾をかざるのは、村上春樹でなければならないだろう。村上は周知のように、著名な作家であるだけではなく、アメリカ文学のすぐれた翻訳者としても実績を重ねているので、日本におけるアメリカ文学の理解や受容を考えるうえで、無視することができない」。

そして平石は、アメリカの「ポストモダンイズム下のリアリズム小説日本版」として『ノルウェイの森』（1987）を詳しく分析します。村上春樹をアメリカ文学史の中にこのように位置付けてしまうのは、極端なやり方です。しかしこれは、村上がいかに「アメリカ的」な作家であるかについての端的な例証でしょう。

というわけで村上春樹は一般にはアメリカ文学の申し子のようなイメージで捉えられることが多いのですが、じつは若いころからアメリカ文学以上にロシア文学に傾倒していたのかもしれない。『國文學 解釈と教材の研究』が1985年3月号で「中上健次と村上春樹」という特集を組んだとき、誌上で若かりし頃の中上と村上の——いまから考えれば、夢のような組み合わせです——対談が行われていて、村上は中上とこんなやりとりをしています。

村上 僕は最初の小説の体験はロシア小説がほとんどだったんですね。

中上 それは十九世紀の……。

村上 トルストイとかドストエフスキーとか、あんなものばかり読んでた時期があって、それが小説を読んだ最初なんですね。アメリカのものを読みだしたのは英語が読めるようになってからで……。

この村上の発言は、対談の具体的な流れを離れて今から考えると、フォークナーを言わば師と仰ぐ中上の迫力を前にして、例えば同じアメリカ文学からフィッツジェラルドなど

を持ち出しても対抗しにくいので、ロシア文学を引っ張りだしたという感じもして、興味深いものです。中上はこの対談ではフォークナーのことはあまり言っていませんが、中上—フォークナー、村上—フィッツジェラルドというイメージはこの頃からあったはずでしょう。そこで中上—フォークナーに張り合うには、トルストイやドストエフスキーのような大物を持って来なければならない。もしも世界文学のランキングのようなものを作るとすれば、ドストエフスキーはフォークナーのさらに師匠格の存在だし、実際、共通点も少なくない——といったことを、二年ほどまえに、諏訪部浩一さんに頼まれて、「聖書とウィスキー——ロシア人はフォークナーをどう読んできたか」というエッセイにまとめて、日本ウィリアム・フォークナー協会の雑誌に寄稿したのですが……私が柄にもなくその原稿依頼をお引き受けしたのは、なんといっても諏訪部さんが将棋の名人だからで、これは本当にすごい。尊敬している人からの依頼は断れません。そういえば、ナボコフの若島正さんも詰将棋の天才で、いつか現代文芸論研究室のパーティでこの二人がじっくり何かについて話し込んでいたので、てっきりアメリカ文学の話をしているのだろう、みんなが楽しくはじけているパーティの場で真面目だなあ、と私は想像したのですが、そばに寄って聞いたらなんと、将棋の話をしていたのでした。

いや、またちょっと脱線しました。どうも今日の講義はなかなか前に進みませんが、閑話休題。実際、村上春樹の初期の小説では、要所要所にドストエフスキーへの言及が繰り返し出てくることはよく知られています。村上とドストエフスキーについてはすでに色々な指摘があり、私も多少書いてきましたので、ここでは詳しく触れませんが、一つだけ、一番鮮烈だった箇所を挙げれば、『1973年のピンボール』のこんな会話でしょう。

「殆んど誰とも友だちになんかなれないってこと？」と209。

「多分ね」と僕。「殆んど誰とも友だちになんかなれない」

それが僕の一九七〇年代におけるライフ・スタイルであった。ドストエフスキーが予言し、僕が固めた。

「ドストエフスキーが予言し、僕が固めた」という言葉は印象的で、初めてこれを読んだときまだ二十代だった私はびっくりしました。1970年代の日本の現代的ライフ・スタイルを19世紀ロシアの文豪と結び付けるのはあまりにも唐突に思えたからです。そもそもドストエフスキーというのはもっと「真面目に」言及されるべき作家であって、こんな形で名前を使っていいのだろうか？ しかし、このように、同時代の風俗的な描写の中に、一見場違いにも見える外国の古典的大作家の名前を挿入するという、「ポストモダンの遊びの手法」と呼ぶべきものは、このころ村上春樹が愛読し、彼にもスタイルのうえで影響を与えたと思われるカート・ヴォネガットの——当時は名前にジュニアがついていましたが——『スローターハウス5』の手法を模倣したものである可能性がありそうです。カート・ヴォネガットの小説では、登場人物の一人、SF好きのアメリカ人元歩兵大尉ロー

ズウォーターがやはり唐突に、ドストエフスキーに言及します。

人生について知るべきことは、すべてフォードル・ドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』の中にある、と彼（ローズウォーター—沼野注）はいうのだった。そしてこうつけ加えた。「だけどもう、それだけじゃ足りないんだ」（伊藤典夫訳）

ちなみに、『海辺のカフカ』という村上春樹の小説がありますが、私はこのタイトルにも「ポストモダンの遊び」を感じます。少なくとも私のような真面目な（笑）昔の文学青年には、ドストエフスキーやカフカの名前をこんな風に使うことは考えられなかった。カフカといえばやはり 20 世紀世界文学の核心ににいるような作家で、その名前に言及するときは畏敬の念から少し声をひそめるくらいだったのです。しかも、カフカの生まれ育ったチェコという国は海がありません。カフカの伝記を調べると、1914 年と 1923 年の二度ほど、確かにバルト海のほうに行ってはいるようですが、それにしても「海辺のカフカ」とは！

チェーホフへの転換とノンフィクションの問題

どうも話がそれ続ける傾向があって困りますが、話をまた戻すと——その後も村上作品におけるドストエフスキーの優勢はずっと続いていくのですが、『1 Q 8 4』に至って、言わばチェーホフへのシフト・チェンジが突然行われました。ここには、いわゆる「チェーホフの銃」への言及が繰り返し現れ、小説のプロット構成がひょっとしたらこのチェーホフ的原理に基づいているのかもしれないと、読者に思わせます。「チェーホフの銃」については、『1 Q 8 4』Book2 の第 1 章で、サハリン出身の朝鮮人であるタマルという人物が、「物語の中に拳銃が出てきたら、それは発射されなくてはならない」と説明しています。文学作品には余計なディテールをゴテゴテ持ち込んではいけないという、簡潔さを美德と考えたチェーホフらしい格言として知られるものです。これを言うタマルがサハリン出身であることにも注意してください。『1 Q 8 4』のプロットに関して言えば、Book 2 の結末近くで、青豆は拳銃の銃口を口の中に突っ込むので、「チェーホフの銃」の原理にしたがえば、当然、銃は発射され、青豆は自殺するものと予期されます。しかし、村上春樹がその原理にひねりをくわえて Book 3 につながっていくことは読者の知る通りです。村上春樹はカート・ヴォネガットのローズウォーターに倣って、「だけどもう、チェーホフの銃だけじゃ足りないんだ」と主張しているかのようです。

さらに『1 Q 8 4』のチェーホフとの関係で予想外とも言える印象的なことは、あまたあるチェーホフの諸作品の中でも、いま日本ではあまり読まれなくなっている『サハリン島』を前面に打ち出した点でしょう。どうして今、よりによって、ロシアの辺境に追いやられた百数十年前の流刑囚たちを描いた作品なののでしょうか。現代の日本から遠すぎるのではないか。

そもそもチェーホフが1890年にサハリンに行ったとき、どうしてそんな無謀で無意味な(?)旅行をするのかと、周囲の多くの人たちが訝しく思ったのです。肺病を病んだチェーホフにとって何週間もかかって鉄道と馬車と船を乗り継いでモスクワからユーラシア大陸の東の果まで旅行するということ自体、自殺的な行為だったはずです。チェーホフはサハリンに住む流刑囚たちの「人口調査」を行ったので、それ自体は立派な仕事ではありました。しかし、誤解してはならないのですが、サハリンのチェーホフには医学的な検査・診断のための本格的な装備があったわけでもなければ、調査助手がいたわけでもないということです。ですので、調査とはいっても、後で単行本にまとめられた『サハリン島』でチェーホフ自身が書いている通り、ごく素朴な「人口調査」に限られていました——ここでいう「人口調査」とは住所・氏名・身分・年齢など一三の項目を記すための一枚紙の調査票に、訪ねた人たちのデータを書き込むだけのことです。チェーホフは特注の調査票を現地の警察付属印刷所で印刷し、ほぼ一万枚のデータを集めました。その第13項は「病気」となっており、医師による調査としては一番重要な項目にも思えるのですが、この項目はほとんど空白のままです。この点について不思議なことにロシアの研究者の誰も注意を払っていないのですが、私の推測ではチェーホフは住民たち一人一人の病気を把握するところまではとてもできなかったのでしょう。しかし、それ以外の単純な項目だけでも一万人分の調査を独力で行ったのは、想像を絶するほどの作業です。調査票そのものはチェーホフの死後百年以上もモスクワの文書庫に保管、いや、死蔵され続け、誰も活用することがないままだったのですが、ようやく2005年にサハリンの石油マネーの援助を受けて、膨大な資料集として出版されました。そこには現存する7446枚のカードの内容がすべて記載されています。しかし「病気」についての情報がそれらのカードには殆ど記載されていないので、この「人口調査」はとうてい医学的な調査と言えるものではありません。

それではチェーホフはどうして他ならぬサハリンに、自ら行かなければならなかったのか。この程度の「人口調査」ならば、医師でなくとも、まして作家でなくとも、できたのじゃないか？ 彼の唐突とも見える決断の背後には、何があったのか。これはチェーホフの伝記研究上、いまだに議論が続き、単一の正解と思えるものが出ていない謎の一つで、私はチェーホフにおける「サハリン問題」と呼んでいます。この点については拙著『チェーホフ 七分の絶望と三分の希望』（講談社、2016年）で一章を割いて論じていますので、詳しくはそちらに譲りますが、これまで様々な仮説、憶測が提出されてきました。その中には女性関係から逃れるためという、面白いけれども信憑性のないものから、煩わしく俗悪な首都の文壇に嫌気がさしたとか、創作力の枯渇、停滞感を打破し、新たな活力を得るためとか、原因を内面に探るものまで諸説あります。病身を押しての無謀な旅行が死の危険と隣り合わせだったことを考えると、本人もはっきり意識していない、秘められたタナトス、つまり死の衝動もあったのかもしれない、などと私自身は——これも根拠はあまりないのですが——考えてみたこともあります。

その点について、村上春樹はどう考えたのでしょうか。『1 Q 8 4』Book 1、第20章で、天吾はチェーホフがどうしてサハリンに行く気になったのかについてこんな風に考察しています。

「チェーホフは小説家であると同時に医者だった。だから彼は一人の科学者として、ロシアという巨大な国家の患部のようなものを、自分の目で検証してみたかったのかもしれない。自分が都会に住む花形作家であるという事実に、チェーホフは居心地の悪さを感じていた。モスクワの文壇の雰囲気とうんざりしていたし、何かというと脚を引っ張り合う、気取った文学仲間にも馴染めなかった。底意地の悪い批評家たちには嫌悪感しか覚えなかった。サハリン旅行はそのような文学的垢を洗い流すための、一種の巡礼的な行為だったのかもしれない（後略）」。

この箇所を読むと、チェーホフのことを言っているながら、村上春樹自身にも妙にあてはまる側面があることに気づかざるを得ません。村上春樹は1995年8月、長期にわたる海外生活（本人が内心思っていたところでは「イグザイル」exile）を終えてアメリカから帰国しました。「底意地の悪い批評家たち」への嫌悪感というのは、村上自身が日本の文芸界に対して抱いていた感情でもあったでしょうし、長期にわたる彼の海外滞在の一因でもあったのではないかと思います。他方、チェーホフのほうはどうかと言えば、やはり無神経な批判に対してはかなり神経をとがらせていたことは事実です。例えば、サハリンに発つ直前の1890年4月10日には、『ロシア思想』3月号の新刊紹介欄で自分が「無原則な」作家とけなされたことに強く抗議する手紙を、同誌編集者であるヴコル・ラヴローフに送り、これは批評などと言うものではなく「中傷」である、私は「無原則な作家、あるいは同じことだが、ろくでなしであったことも一度もない」と書いています。ちなみにここで使われている「無原則な」беспринципный という形容詞は文字通り「原則」принципのないという意味ですが、当時のロシアの文脈では、特に行為に一定の原則がない、無定見な、ちゃらんぽらんな、ご都合主義的な行動をする、といった強く否定的な意味になります。急進的な立場のインテリから、思想的な旗幟を鮮明にしないチェーホフがそのように見られたのは、意外ではありませんが、チェーホフとしてはサハリン旅行という大変な企てまでしている自分が「無原則」であると罵られるのには我慢ならなかったようです。

こうしたことを考え合わせると、村上春樹がチェーホフのサハリン旅行に共感を抱いた理由についても、ある程度推測をすることは可能でしょう。チェーホフは通常の文学的な営みを一時捨てて、医師としてサハリン島を調査するという途方もない社会的コミットメントを行ったわけですが（それは必ずしも医学的な調査として大きな成果を挙げたわけではないのですが、そもそも「人口調査」自体まったく前例がなかったわけですから、チェーホフのやったことには社会的な強い意味合いがあったとは言えます）、そのような行動は、オウム真理教事件後の村上春樹の「調査」に重ね合わせることができるからで

す。村上春樹はアメリカから帰国後すぐに地下鉄サリン事件の被害者や、広い意味で加害者側である元信者たちとのインタビュー取材を開始し、裁判にも通い、『アンダーグラウンド』（1997）および『約束された場所で』（1998）という聞き書きに基づくノンフィクションを書きました。これはいわば、村上春樹にとっての社会的コミットメントの形であり、彼の『サハリン島』だったとも言えるのではないのでしょうか。チェーホフと村上のこのような社会的コミットメントの試みに対する、周囲の一部の人々の無理解や皮肉な態度も、共通しています。『1 Q 8 4』で天吾はこんな風に説明します。

「どうしてチェーホフは作家としての大事な時期に、あんな無駄な、意味のないことをしたのだろう」とまわりの人々は囁き合った。批評家の中には「社会を狙ったただの売名行為」と決めつけるものもいた。「書くことがなくなって、ネタ探しに行ったんだろう」という意見もあった。

興味深いことに、こういった周囲の冷ややかな反応は、チェーホフよりも、むしろ村上春樹にあてはまるのかもしれませんが。チェーホフのサハリン行きは確かに周囲を驚かせ、当惑させ、無意味で無謀な企てだと思われたのですが、「社会性を狙ったただの売名行為」「ネタ探し」といった言葉でチェーホフをあからさまに貶めた批評は、私が知る限り限りでは当時のロシアには見当たらないようです。その一方で、村上春樹の『アンダーグラウンド』に対してはまさにそういった批判があったことを、村上自身が『村上春樹全作品 1990-2000』第6巻に寄せた自作への解題で認めています——「僕が小説を書くことに行き詰まって、それを打開するために、この地下鉄サリン事件を「利用」して本を書いた、という批判を受けたこともある」。

ちなみに、村上の聞き書きに基づくノンフィクションは、文学的手法としては、『苦海浄土』の石牟礼道子よりは、旧ソ連での悲惨な戦争体験や原発事故のトラウマを抱えた市井の人々とのインタビューを文学的に再構成したスヴェトラナ・アレクシエーヴィチのほうに近いものだと私には思われます。こうした記録文学の意味、そして「記録」でありながら持つことになる「文学性」「フィクション性」についてこれらの作家の作品を比較しながら分析するということは、現代の世界文学研究にとって大きな課題でしょう。

気の毒なギリヤーク人、幸福なギリヤーク人

ところで『1 Q 8 4』における『サハリン島』では、ギリヤーク人という北方少数民族についての記述に焦点が合わされていて、『サハリン島』が論じられる Book 1 の第 20 章は「気の毒なギリヤーク人」と題されているのですが、これはちょっと不思議なことです。そもそも『1 Q 8 4』でチェーホフの『サハリン島』が取り上げられたことからして意外であった上に、そこで焦点になっているのは『サハリン島』の記述の大部分を占める

ロシア人流刑囚ではなく、ごく少数のマイノリティ民族だからです。『1 Q 8 4』で天吾は「ギリヤークというのは、ロシア人たちが植民してくるずっと前からサハリンに住んでいた先住民なんだ（……）。チェーホフはサハリンのロシア化によって急速に失われていくギリヤーク人たちの生活文化を間近に観察し、少しでも正確に書き残そうと努めた」と説明したうえで、『サハリン島』におけるギリヤーク人についての記述を選び出して、ふかえりに読み聞かせています。そしてギリヤーク人の極度に不衛生な環境についての描写を聞かされたふかえりは「きのどくなギリヤークじん」とコメントし、ギリヤーク人が喧嘩を好まない平和を愛する民族であって、嘘や自慢話を嫌うというくだりに対しては「すてきなギリヤークじん」と反応します。

そして天吾によるギリヤーク人をめぐる一連の引用を締めくくるのは、以下のようなディテールです。

（……）彼らが今にいたるもなお、道路の使命を全く理解していないという一事からしても、彼らがわたしたちを理解するのがいかに困難か、わかるだろう。道路がすでに敷かれているところですら、あいかわらず密林を旅しているのだ。彼らが家族も犬も列を作って、道路のすぐそばのぬかるみを、やっとのことで通っていくのをよく見かける。

非常に印象的なディテールですが、『サハリン島』をいちおう通読した読者でも、ギリヤーク人の奇妙な習性に関するこのような指摘を見落としている可能性があるのではないのでしょうか。というのもこれは、ギリヤーク人について記述した『サハリン島』第11章の本文中ではなく、その最後の脚注からの引用だからです。細かい字の注を読み飛ばすような読者は、『1 Q 8 4』で初めてこの可笑しい細部に気づくことになります。それにしても、村上春樹はどうしてわざわざこのような箇所をことさらに取り上げるのでしょうか。これが『1 Q 8 4』という長大な小説の主題にどう関わるのか。一つ確かに言える興味深いことは、村上春樹がおそらく意図的に周縁から周縁へとまなざしを移し続けているということです。巨大なロシア帝国の（そして日本から見ても）周縁であるサハリン島に注目し、その島の人口の中でも無視できそうなほど人口の少ない周縁的な少数民族に焦点を合わせる。そしてこの少数民族は、出来上がった道の真中を歩かず、いつもその脇を苦労して進んでいく……。

ギリヤーク人といっても日本ではあまりなじみがないでしょう。少し説明を加えれば、民族名としてのギリヤークというのはかつてのロシア語名で、チェーホフの時代には広く使われていましたが、現在は自称のニヴフが使われています。ロシア東部、アムール河下流とサハリン島に居住する北方少数民族で、人口は2010年の統計で4466人（そのうちサハリン居住者の人口は2253人）。その言語は古アジア諸語に括られますが、直接親縁関係のある言語がなく、孤立しています。とはいえ、ソヴィエト時代を通じてロシア化が進み、伝統的なサケマス漁や海獣狩猟を生業とした暮らしは近代化を経て急速に失われつ

つあり、現在は大部分がすでにロシア語を習得し、ギリヤーク語を母語として使う人口は死滅する恐れがあります。そういえばギリヤーク尼崎という有名な大道芸人・舞踏家がありますが、彼はギリヤークの血を引いているわけではなく、風貌がギリヤーク人に似ていることからの芸名だといえます。

このようにアイヌよりもさらに「周縁的」な存在であるため、ギリヤーク人が日本文学に登場するケースは稀でした。しかし、村上の「気の毒なギリヤーク人」は、そのタイトルからして、はるか昔に大江健三郎によって書かれたある作品をどうしても連想させます。それは「幸福な若いギリヤーク人」という短編です。「ギリヤーク」は「ギリヤーク」と少し表記が違っていますが、これはどちらも同じことで、ロシア語の *гиляк* を日本語のカナ表記する際のバリエーションです。ロシア語の発音に忠実に表記すれば、むしろ「ギリヤーク」になります。いずれにせよこの民族名をタイトルに冠した小説は日本では他にほとんどないのではないのでしょうか。最初に『小説中央公論』1961年1月号に掲載された後、『大江健三郎全作品3（第1期）』（新潮社、1966年）に収められたきり、それ以後作品集などに再録されることがなく、最近完結した講談社版『大江健三郎全小説3』（2018年）に、半世紀以上の歳月を経て再び収録されたので、一般読者には長いこと忘れられた作品だったといってもいいでしょう。ちょうど1960年末から1961年初頭にかけては「セヴンティーン」「政治少年死す」が発表されて世間を騒然とさせ、ジャーナリズムや批評界の関心ももっぱらそちらに奪われてしまったため、陰に隠れてしまったということもあるかもしれません。しかし、その後、もっぱら四国の山の村人たちに関心を集中させていく大江健三郎にしては珍しい北方の「海の民」としてのギリヤーク人を描いた作品として、注目に値するものですし、ひょっとしたら村上春樹の「気の毒なギリヤーク人」はこの大江作品に対する遠いこだまになっているのではないのでしょうか。じつはこの時期の大江には北方への関心が強く、「幸福な若いギリヤーク人」はその意味では決して孤立した作品ではありません。この時期に大江が脚本を手掛けたテレビ・ドラマに「オタスの森——われらの中のギリヤーク人」がありますし（1960年11月6日、NHKで放送。台本は未公開。映像記録は残念ながら残っていないそうです）、やはり同時期の『青年の汚名』（1960年）は北海道のもととアイヌが住んでいた島を舞台とした漁師たちの争いを描いた長編で、ここにも脇役ながらギリヤーク人女性が登場します。

「幸福な若いギリヤーク人」は、北海道北東のオホーツク海沿岸にある小都市を舞台としています。主人公は「アメリカ・インディアンのように皮膚が黒く硬いのでインディアンとよばれている」二十歳の製材工の青年です。最近、その彼を背後から見つめる謎の人物があり、労組結成の運動に加わっている青年は、最初「警察のスパイ」かと疑い、警戒します。しかし、あるとき「見つめる男」は青年に話しかけ、じつに意外な依頼をもちかけるのです。「おまえは、ギリヤーク人だ」と男は断定したうえで、舟をあやつる名手のギリヤーク人ならば、磯船で密出国してソ連に逃げる手助けをしてほしいと頼むのです。

実は主人公はそれまで自分の出自を知らず、日本人として育てられてきました。アイヌ

が嫌いな彼は、かつてアイヌと殴り合いの喧嘩までもしたことがあります。それも日本人としてアイヌと戦ったと思っていました。しかし母親を問い詰めて分かったのは、昭和20年冬、樺太から5歳の幼児として引き上げてきた彼の両親はギリヤーク人だということでした。主人公はそこで自分のアイデンティティを確認するために、美幌の療養所に生存しているというギリヤーク人の老シャーマンに会いに行きます。そして老人に「おまえギリヤーク人の晴れ男ぞ」と祝福を受け、激しい幸福感を感じるのです。老人は、「ギリヤーク人は、樺太にいた人間のなかでいちばん古い人間よ、古代アジア人ぞ、日本人よりも古い、アイヌよりも古い、オロッコ、サンタンよりも古い人間ぞ」と説明してくれ、主人公は自分が何者であるかをしっかりと確認するのです。結末で青年は、二十五になったらサハリンに渡って「ギリヤーク人の娘」を嫁として連れて来ようと考えます。そして小説は、「かれにとって今ほど、世界がこのまじい場所に思えることはなかった」と結ばれます。この結末は大江のこの時期の小説にとって珍しいくらい晴れやかなものです。

こうして見ると、日本とサハリンの間の境界領域に置かれ曖昧になりかかっていた主人公の民族的アイデンティティ再発見をめぐる、じつに肯定的な物語になっていることが分かるでしょう。それに対して村上の「気の毒なギリヤーク人」は、チェーホフの時代にまでさかのぼるので、大江の「ギリヤーク人」よりは70年前のことを扱っていることになり、ギリヤーク人の境界性、周縁性をむしろ強調することによって、大江が一瞬抱いた「晴れ男」のビジョンに微妙な陰影を付け加えているように思われます。

世界でただ一人のニヴフ作家サンギに会いに行く

ここで話は、冒頭の村上春樹会議に戻ります。普通の国際学会かと思って出かけて行ったのですが、ユジノ・サハリンスクにあるサハリン州立学術総合図書館で2019年9月に開催された村上春樹の70歳を祝うこのイベントは「読者の会議（コンフェレンツィア）」と名付けられていて、どういうことかと思ったら、研究者や専門家だけでなく、地元の学生たちもプログラムに入っていて、研究者も学生も「読者」として語り合う趣旨のものでした。学生たちの報告は、決して読書感想文といったレベルではなく、作品を読み込んで構造や主題を自分の言葉で分析していて、「プロ」の学者の報告に遜色なかったので、感心しました。ロシアの読書文化の高さを示すものでしょう。

私はここで「村上春樹とロシア文学」という報告を行ったのですが、その頃の私の過密スケジュールの中で無理をしてでもサハリンへの招待を受けたのには、もう一つ、目的がありました。この機会にウラジーミル・サンギに会うことができないか、と密かに思っていたのです。ウラジーミル・サンギは世界でただ一人のニヴフ作家と呼んでいい存在です——ここからは、サンギに敬意を表するために、「ギリヤーク」ではなく、現在民族名として公に用いられている「ニヴフ」に切り替えます。なお、「ニヴフ」という単語はそれ自体で「人」を表していて——それはギリヤークでもアイヌでも同じです——「ニヴフ人」というふうに「人」をつけて言う必要はありませんが、日本語ではそれをつけないと

何のことか分からない人も多いので、まあ、どちらでもいいことにしましょう。サンギは1935年サハリンの北東部にあるノグリキに生まれ、レニングラードのゲルツェン教育大学に学び、ソ連作家同盟にも会員として迎えられ、1960年代半ば以降はモスクワで作家活動をしていました。そしてペレストロイカ後、サハリンに戻り、現在ノグリキ在住です。80代半ばの今でも、ニヴフ民族の文化を守るための運動の指導者として精力的に活動しています。主要作品はすべてロシア語で書いていますが、ニヴフ語の読本、教科書執筆などにも力を入れ、ニヴフの口承文学の記録もまとめています。ニヴフの人々とその生活、伝統を描いた彼の作品としては、『サハリン・ニヴフ物語——サンギ短編集』（北海道新聞社、2000年）と、長編『ケヴォングの嫁取り』（群像社、2015年）の二冊が、自身サハリン生まれである田原佑子さんによって邦訳されています。

私は昨年9月にサハリンの村上会議に出かける前に、記者の田原さんにサンギの連絡先を教えていただき、彼に直接連絡をとり、私が会議のためにユジノ・サハリンスクに滞在している間になんとか会えないだろうか、と頼んでみました。もちろん彼が住む北の町ノグリキまで行こうと思っていたのですが、サハリンの交通は便が悪く、南端のユジノ・サハリンスクから北東のノグリキまで行くのは、私のような土地勘もない現地に不慣れな外国人には容易なことではありません。結局、サンギ氏がみずからユジノ・サハリンスクまで来てくれることになったのはありがたかったのですが、会う日時や場所は事前に決められず、彼がユジノ・サハリンスクに到着したら電話でやりとりしようということになりました。幸い携帯電話にはすぐ通じたのですが、電波の状態もよくなく、ホテルの名前がどうしても聞き取れません。三度くらい繰り返してもらったのですが「……ロン」としか聞こえず、それを手がかりに地図で探したら、やれやれ、「モネロン」というホテルが私の投宿しているホテル・サッポロから歩いて5分くらいのところであって無事サンギ氏に会うことができました。モネロンというのはサハリンの地理に疎い私は知らなかったのですが、サハリン南西部に浮かぶ（稚内からも見える）小島の名前で、旧日本語名は海馬島だということは後で分かりました。

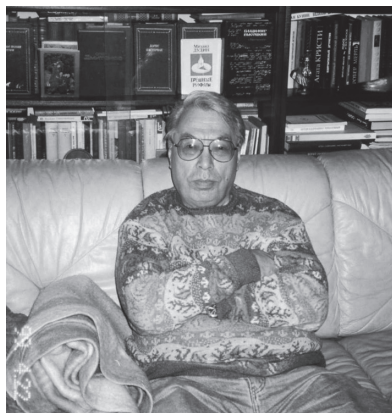
ホテルで会ったサンギは、80歳半ばの高齢にも関わらず矍鑠とし、なかなかの美男子でした。ちょっと不謹慎かもしれませんが、若いころはさぞ持てただろう、ととっさに思ったものです。ところで私は長いこと、ロシア文学を専門の一つとしながらも、「純粋な」ロシア人作家よりも、非ロシア人民族作家との付き合いのほうが多かったくらいで、これまで会ってインタビューをしたり、親しく付き合ったりした作家・詩人としては、ブラート・オクジャワ（ゲルジア・アルメニア人、1924-97）、ファジリ・イスカンデル（アブハジア人、1929-2016）、ユーリイ・ルイトヘウ（チュクチ人、1930-2008）、ゲンナジー・アイギ（チュヴァシ人、1934-2006）、アナトリー・キム（朝鮮人、1939-）などがいて——どうぞスライドを見てください。これは全部私が撮影した写真です。みんないい顔をしているでしょう！（ここでスライド映写）



ブラート・オクジャワ モスクワの自宅、
1993年



ファジリ・イスカデル ヴヌーコヴォのダー
チャ、1992年



ユーリイ・ルイトヘウ ペテルブルクの自
宅、1999年



ゲンナジー・アイギ 東京の居酒屋、
1997年



アナトリー・キム モスクワ、1990
年代？

私自身、ニヴフ人を間近に見るのはこれが初めてだったのですが、不思議な気高さと、それでいて懐かしさのような親近感を覚えました。その時の会話は録画してありますので、一部をビデオで見ていただき、内容を訳してみしましょう。インタビューは2019年9月19日、ユジノ・サハリンスクのホテル・モネロンにて、ロシア語で行われました。（ここでビデオ映写）

——サンギさんはニヴフの出自を持ちながら、圧倒的にロシア語が優勢な環境で、作家として活動を始められたわけですが、どういう風に道を切り開いたのでしょうか？ 作家としての最初の一步はどんなものでしたか？

サンギ 作家になるためには、まだ非常に都合のいい時期に生まれたと思います。つまり私が生まれたとき、ニヴフ人は古代から受け継いできた、昔ながらの伝統的な生活のスタイルをまだ守っていたんです。もちろんソヴィエト政権のロシア人たちは、ニヴフの生活を変え、全体として破壊してきて現在に至るわけですが、当時はまだ非常に多くのものが残っていた。小さな子供のころから、私はニヴフの歌を聴いて育ったんです。ニヴフ人はとても歌が好きで、いつも歌っていた、男も……

——書かれた文学はまだなかったわけですね？

サンギ そう、なかった。女たちは例えば冬用の毛皮靴を縫いながら歌ったものです、いつも歌っていた。男たちは、例えば魚をつくためのモリを研いだり、櫓の板を削ったりしながら、歌った。それから、よくお客さんが来たものですよ。あちこち違う場所に住んでいるニヴフの氏族の長老たちが。お互いのところを客として訪問しあうという習わしがあったんです。魚の漁やセイウチ狩りの後、客たちは自分の氏族に伝わる歌を歌い、伝説や神話を語った。自分の民族の自然な精神的環境で育ったんです。こういった暮らしは当時まだ破壊されていなかった。生まれるのが間に合った。子供時代はすべてこういった環境で過ごしました。

——言葉についてはどうでしょう？ 子供のころ話していたのはニヴフ語だけですか？ ロシア語はまだ知らなかった？

サンギ そう、ニヴフ語だけです。学校に通うようになるまで、ロシア語は話せなかった。——でも、学校でロシア語を学んだわけですね？

サンギ そうです、学校ではロシア語を話すようになった。そういえば、こんなことがありましたね。寄宿舎に住んでいたんです、「文化基地」と称するものです。初期のソヴィエト政府が先住民の少数民族のために、文化基地をいくつも作りました。そこでニヴフ、オロッコ、エヴェンキ、チュクチといった民族の文化的伝統に基づいて住民を文化活動に参加させていった。それぞれの民族語を使って。これはまったく正しいやり方でした。すべてが崩れていったのは、その後のことです。

生まれ故郷のチャイヴォ村から七〇キロほど離れたノグリキの寄宿舎に入ったとき、寄宿舎の長は、アムール州出身のエヴェンキ人女性で、この人はレニングラードの北方民族大学を卒業していました。あるとき彼女が子供たちを映画ホールに集めて、こう言いまし



ヴラジミール・サンギ

た。「君たちとお話をするために、偉いおじさんが来ています。しっかりと聞くように」。この偉いおじさんというのは、綺麗な立派な服を着た人で、なぜか私のほうを見ながら、こう言うんです。「君たち、ニヅフ、エヴェンキ、オロッコの子供たちの中には、人民の敵の子供たちがたくさんいる」。それでぴんと来ました。1938年に私の父は逮捕され、銃殺されています。日本のスパイだとされて。

——でも、もちろん、でっちあげでしょう？

サンギ 私たちの住んでいたのと同じ湾岸地域に、石油利権を持った日本の企業が来ていたんです。湾内には日本のスクーターが停泊していた。そこから日本人は小型モーターボートで対岸に渡り、石油が出るところを探していた。私たちは自分の場所で網を仕掛け、魚を獲って暮らしていた。そういうことです。

で、寄宿舎にきた偉いおじさんが言うには、「お前たちの中には、人民の敵の子供たちがたくさんいる。だから自分の言葉で話すことを禁止する。お前たちの言葉は私には分かん。だからお前たちが自分の言葉で話したら、何を話しているのか分からない。ひょっとしたら、反ソヴィエトの陰謀を企んでいるかもしれない。だから自分の民族語で話すことを禁止するのだ。これからはロシア語だけを話すように」

——で、みんなそれにおとなしく従ったんですか？

サンギ いや、偉いおじさんが行ってしまったら、子供たちはいつも通り駆けまわったり、跳んだり、遊びだして、禁止されたことを忘れてしまった。でも私はなぜか心が落ち着かず、突っ立ったままでした。ひどく傷ついたんです。と、突然、こんな言葉が口をついてあふれ出してきた——「クハイ、チュイ、フウイ、ヌイク、ヌイク、チャイヴォ、ロフ、ヴィ、ヌイク、ヌイク」。そんな風に、初めての詩が一息に湧き出てきたんです。

——偉いおじさんが使うのを禁止したニヅフ語ですね？ いったいどんな意味なんでしょう？

サンギ 「犬たちよ、右へ、犬たちよ、左へ、僕はチャイヴォに帰りたい」という意味です。チャイヴォというのは私の故郷ですからね、要するにこんな寄宿舎からはもう逃げ出したい、とういうこと。それを聞いた他の子供たちが駆け寄ってきて、みんな口々に、村の名前を自分の故郷の名前に置き換えて詩を口ずさみながら、駆け回った。すると寄宿舎の長のエヴェンキ女性が私に詰め寄って、怒ったんですよ。「偉い方が来て、君たちは自分の言葉でしゃべっちゃいけないとおっしゃったばかりなのに、なんてことでしょう。自分の言葉で詩を作って歌うなんて。隅に立っていなさい！」

でも、翌朝、寄宿舎長の女性は私たちを起こしには来ませんでした。窓の外を見ると、彼女がぼろぼろの、表面が破れて綿があちこちから飛び出している外套を着て、しょんぼ

り立っているじゃありませんか。仕事を首になってしまったらしい、ニヴフの子供たちが自分の民族語で話すだけでなく、詩まで作るのを見逃してしまったため……。

——詩人の誕生ですね。

サンギ そう、それが私の最初の詩だった。そんな風に始まって、小学校で詩を書くようになったんです。

サンギの小説『ケヴォングの嫁取り』には、じつは、他ならぬチェーホフ自身も登場します。どこに着地するかわからなかったこの「最新講義」を締めくくるにあたって、再び原点のチェーホフに立ち返るために、サンギがチェーホフをどのように描いているか、示すことにしたいと思います。

運命が自分を誰に引き合わせたのか、ニヴフは知るよしもなかった。私服の人物にとっては、ニヴフの滅びゆく一族の長老は単なる<ギリヤーク>にすぎなかったし、カスカジークにとってはロシアの文豪チェーホフは<お偉方>^{チヤンギ}の一人に過ぎなかった。

「上に立つどんな権威も知らなかったし、知ろうともしない。美しい、誇り高い民族です、しかし、どうやら、彼らの時代はもう先が見えているようですね」馬車が動き出したとき、チェーホフは言った。（『ケヴォングの嫁取り』田原佑子訳）

そういえば、サンギ自身がチェーホフについて、特に『サハリン島』におけるチェーホフによるニヴフ人の描写について、どう思うか、会った時に訊かなかったなあ、と後悔し、後からサンギ氏にメールで質問を送ったところ、すぐに次のような返事が来ました。このメールにあるチェーホフからの引用は『サハリン島』第11章からのもので、やや不正確ですが、それは記憶に頼って書いているからでしょう。そのまま訳してみると——

ニヴフ人をサハリン島の植民地化（チェーホフの原文では「ロシア化」だが、サンギはそれを「植民地化」と言い換えています——沼野注）のプロセスに引き込もうとするサハリン総督の意図に対して、チェーホフは『サハリン島』の中でこう答えています——「もしもニヴフ人の植民地化がどうしても避けて通れないものだとしても、何よりもまず彼らの意見と、利益と、特徴を考慮に入れなければなりません」。もしも現代の政治指導者たちが——プーチンも含めて——民族問題に関するチェーホフのこういった指示に従っていれば、サハリンのニヴフ人は帰還不能の一線を越えることはなかったでしょう。（2020年2月6日付メールより）

サンギがこのメールで使っている「帰還不能の一線」という表現に、私の目は釘付けになりました。英語でいえば「ポイント・オブ・ノー・リターン」、つまりもはや引き返すことができない地点をニヴフ民族は越えてしまった、ということです。つまり、もはや滅

びるしかないのでしょうか？ サンギはおそらくそれは理解している。しかし、それでもニヅフのために民族運動を止めることができない。つまり、彼の美しい気高さは、滅びる運命だと分かっている民族のためにそれでも戦わなければならない、矛盾を引き受けているところから来るのではないかと思いました。本日の最新講義はこれで終わります。皆様、ご清聴ありがとうございました。

付記 この「最新講義」は、『すばる』2020年3月号に掲載された拙文「チェーホフとサハリンの美しいギリヤーク人——村上春樹、大江健三郎からサンギまで」（104－116ページ）に基づいて増補・削除・改訂し、文体を改めたものです。『すばる』編集部のご理解に感謝いたします。また『すばる』のための原稿執筆にあたっては編集部の金関ふき子さんに大変お世話になりました。金関さんの激励がなければ、この文章がこのような形にまとまることは（いや、やっぱり、まとまっていなかったか？）なかったでしょう。